

歴史地理学における最近の動向

菊 地 利 夫

一、はじめにあたって

歴史地理学会二十周年記念の広島大会において、特別講演を行うことを常任委員会から指名をうけました。ここに「歴史地理学における最近の動向」と題して、若干の問題をとりあげて申し上げます。

歴史地理学において、従来からの伝統的傾向に対して、最近二十～三十年このかた、新しい傾向が次第に強まっています。この動向は何人も認めていることであります。かえりみれば、二十世紀のはじめ、くわしく言えば、一九世紀末からありますが、歴史地理学の理論は、百花齊放のように、多様に展開していた時期があったことを思いだしていただけないと思いません。しかしその後の数十年間は、歴史地理学の理論が固定化し、変化にとぼしく、いたずらに慣行軌道を走り、色あせた姿をさらしつづけてきました。わずかに諸理論の結合がみられたにすぎません。

ところが二十世紀半ばをすぎると、この伝統的傾向に対して、新しい傾向がしだいに強調されはじめて、今や歴史地理学が激変さえしようとしています。現代の歴史地理学には、新しい大なる入り口が開きはじめていることを認め

る人々が増加しています。わたくしたちの前方には、歴史地理学にとっては、未知の知識の大陸テラ・インコギニタがひろがっていることを自覚せざるをえません。わたくしたちにとって、今日の歴史地理学についてその理論を深くほりさげることも大切であります。さらに学際的にも諸科学の理論の動向をひろく見渡しながら、このテラ・インコギニタを展望すべき時期であるといえることができます。この理由は多くの隣接科学においても、歴史地理学と同じような動向が現われているからであります。

二、伝統的歴史地理学の理論の整理

歴史地理学の新しい傾向を申し上げます前に、過去数十年間にわたって、わたくしたちが持ちつづけしてきた伝統的歴史地理学の理論を整理しておきたいと思えます。新しい歴史地理学を「現代歴史地理学」とよべば、伝統的歴史地理学は、「近代歴史地理学」と名づけて、歴史地理学史の最後の頁に書きとめる時期であると感じざるをえません。

いうまでもありませんが、現代歴史地理学といっても近代歴史地理学とは、その本質は異なるわけではありません。歴史地理学とは、現在の地理を研究する現代地理学 Modern Geography に対して、過去の地理を研究する科学であります。そこで歴史地理学の理論といえば、従来から今日にいたるまで異口同音に何人も同じくとりあげる理論があります。ここではかりにこれらを歴史地理学のタイプと言っておきます。そうすれば、歴史地理学のタイプは次の八タイプにわけられます。

- 一 時系列的分布 (Time Segment Distribution) (知_ま知_まの土地と知_ま知_まの人々)
- 二 地理的歴史学 (Geographical history, History with maps)

- 三 地歴史学 (Geo-histoire) / 景觀史 (Landschaft geschichte) / 地域史 (Regional history)
- 四 時の断面に復原する過去の地理 (Time cross section, Historical present)
- 五 現在の地域理解のための過去の地理
- 六 時の断面堆積 (Successive Time cross section)
- 七 占拠系列 (Sequent occupance)
- 八 空間進化系列 (Raum evolution system)

これらの歴史地理学の理論について、それぞれを創始した著名な歴史地理学者の名とその理論の特質を申しあげべきであります。何人も御承知のことであり、かつその時間の余裕ありませんので、省略させていただきます。ただ一言申しあげておかなければならないことがあります。それはこの歴史地理学の八タイプとして、私が数えあげましたが、歴史地理学者によっては、この八タイプのあるものだけを歴史地理学であるとし、他のタイプを歴史地理学ではないとしています。またある歴史地理学者はこの八タイプのどれも歴史地理学であると認めています。この問題について私の考え方を申しあげるのは時間の余裕がないので特に批判をしないで通りすぎることをお許し願いたいと思います。

三、八タイプの歴史地理学の理論は何か

いずれにしても、これらの歴史地理学の理論は、二十世紀初期から百花斎放のように咲き乱れました。しかしながら、これらは歴史地理学の理論とはいふものの、歴史地理学について、そもそもいかなる理論であるかと問いただせ

ば、歴史地理学者によって考え方がさまざまであり、従来からの見解が一致していないことに注目すべきであるといわねばなりません。

ある人々がこれらは歴史地理学の職能・使命であるといっています。またある人々がこれらは歴史地理学の本質理論であるといっています。またある人々が歴史地理学の対象に対するアプローチであるといっています。さらにある人々が歴史地理学の研究方法であるといっています。これらの人々の見解を——多少の無理を承知の上でまとめますと——これらの八つのタイプは、歴史地理学の本質理論であるという人々と、あるいは歴史地理学の方法であるという人々にわけることができません。

もし歴史地理学の八つのタイプの理論が歴史地理学の本質理論であるならば、本質はいくつも存在するのでしょうか。本質理論は歴史地理学において唯一つであるべきであり、それは現在地理学とともに共通であり、同じものがあります。現在地理学においては、この八タイプの理論を本質理論とは申していません。歴史地理学においてもこれらを本質理論というべきではありません。

そうであるならば、これらの八タイプの理論は歴史地理学の方法理論でありましょうか。もし方法理論であるならば、過去の地理について、これを復原する理論とこれを説明する理論でなければなりません。アメリカのハーツホーンがその著「地理学の性格」の中に「地理学とは、その本質が地表面における地域性・地域差であり、これらを説明し、叙述する科学である」と定義しています。ハーツホーンの地理学の本質については人々によって異議があつても、この点について問題を伏せておいて、ここで重要視すべきは、本質とする対象があり、これを説明し、これを叙述することを強調していることであります。これは科学には本質理論があり、これに対する説明理論と叙述理論が存

在するという自明の事実を述べていることであります。

古典的ではありますが、ベルンハイム著「歴史とは何ぞや」をひもといてみましょう。古典であるが故に、古くから主張され、今日に至っても承認せざるをえないからであります。彼は歴史学とは過去の事象について、その史料批判を行い、これを説明し、その結果を叙述する科学であると述べています。歴史学としては、研究方法として史料批判と説明理論があり、さらに歴史叙述があります。しかも彼は歴史学の究極の目的が歴史叙述であり、そのために叙述理論が重要であると強調しています。

歴史地理学におきましても、その理論といえは、当然のことながら、過去の地理について、資料批判と本質理論、復原理論と説明理論とがあり、これらを用いての叙述理論から成立しているといわねばなりません。そして歴史地理叙述こそは歴史地理学の究極の目標であり、その成果であるというべきであります。私は従来の歴史地理学のタイプとして八つもあげたものは、歴史地理学の本質理論でもなく、方法理論でもなく、これらは歴史地理叙述のための叙述理論であることを指摘したのであります。これらは叙述理論でありますから、次々と新しい叙述形態をつくりだされ、歴史地理叙述のタイプをつくりだしてきたのであります。そしてまた将来にも新しい叙述理論がつくりだされるでしょう。それは歴史地理学の混乱ではなく、歴史地理学の進歩の一つの方向であります。すでに今日において、また新しい叙述理論が各国に普及しはじめています。この新しい叙述理論については後程に詳しく申しあげます。

四、本質理論、復原理論の多様化とその関係

ここで簡単に、本質理論・復原理論・説明理論と叙述理論の関係とこれらの理論の多様化について申し上げます。

そうすることによって、その中において、歴史地理学の最近の動向の一つを申し上げることもなります。

本質理論の機能は何でありましょうか。もちろんこれは歴史地理学が他の科学との知識領域のちがいを明確にする理論体系であり、かつ現実から過去の地理事象をひきだす理論的武器であります。伝統的歴史地理学の本質理論といえは次のものがあげられます。

- 一 環境論 (Environmentalism)
- 二 分布論 (Distribution theory)
- 三 地域論 (Regional theory)
- 四 景觀論 (Landschaft Theorie)

などがこれであります。最近の本質理論はこれらを新しく見直した理論であり、旧理論と区別するために、その名称を変えています。

- 一 行動的環境論 (Behavioral Environmentalism)
- 二 空間的組織論 (Spatial Organigaton theory)
- 三 新図形論 (New Cartography)

などであります。このように申し上げると、歴史地理学の本質理論はいろいろさまざまであるのかという疑問が提出されるかと思えます。これは先刻に申し上げたように、歴史地理学の本質は唯一つしかないのでありますが、この本質に対して、いかにアプローチするかということによって、かような変化があることを示しています。しかしそれでもなお何人にも満足を与えるような本質理論がまだかつて提出されていません。これらの本質理論の解説はここでは

省略させていただきます。

復原理論とはなにか、これは現在の地表面から過去の地理を復原する場合の理論であります。これはフランスのマルク・ブロッコが名づけた歴史的逆行法 (*Régressive méthode historique*) とロジール・デイオンが名づけた地理的逆行法 (*Régressive méthode géographique*) に二大別できます。谷岡武雄先生の飛躍的・直接的逆行法と遡及的・間接的逆行法は、いずれも歴史的逆行法にふくめられるものであります。逆行法はブロッコやデイオンたちよりも早くから多くの人々が、歴史地理学において使用されていただけでなく、民俗学でも考古学でも歴史学においても使用されてきました。最近の西ヨーロッパの歴史地理学者たちは、逆行法を検討する論文を多く発表しています。またこれに関連して、叙述理論にも正叙法と倒叙法についても検討されています。

逆行法の検討による新発見は、二つの逆行法の存在と区別であり、その混同を防ぐようになったことでもあります。逆行法とは、一般的には、現在の時点であっても、過去の時点であっても、既知の地理的状态からそれ以前の未知の時点の地理的状态を解明する方法であります。このうち、歴史的逆行法とはもっぱら過去の状態の理解を拡大することを目的とします。これに対して、地理的逆行法とは既知の状態の時点から過去にさかのぼり、未知の過去の状態を明らかにしますが、主な目標は過去の理解だけにとどまらず、現在の地域にいたるプロセスの理解にあります。

このような復原理論と本質理論とは密接な関係があります。過去の地理を復原する場合には、特定の本質理論をもって既知の時点の地理的状态からそれ以前の未知の地理的状态へ接近します。したがって復原されたある時点の地理的状态は、いまだ完全に理論上から秩序づけられていなくとも、その本質理論からみた過去の地理の資料的状态にあります。あるいはまたその本質理論によってまとめあげられる性格を持っています。もともと過去の地理は特定の本

質理論によることがなくして、漫然と復原できるものではありません。したがって復原できた資料的狀態はその本質理論によって秩序づけられることとなります。

五、説明理論と叙述理論の多様化とその関係

説明理論につきましては、最近の歴史地理学において多くの論著が発表されて、伝統的説明理論から新しい説明理論に移行しようとする著しい傾向が強まっていることに注目すべきでしょう。たとえば、アブラー等著「空間的組織」やハーベイ著「地理学の説明」などの近著があります。伝統的歴史地理学における説明理論として次のようなものがあります。

一 決定論的因果の説明 (Deterministic cause and effect explanation)
 二 生態的機能的説明 (Ecological Functional explanation)
 三 時間的説明 (Temporal explanation)
 などであります。時間的説明については、ハーベイはさらに次のように細分化しています。

- 一 時系列的説明
- 二 発生論的説明
- 三 発達段階的説明
- 四 仮定的プロセス説明

最近の新しい傾向として、説明理論は次のようなものがあげられます。

一 システム分析

二 計量分析（モデル ビルディング）

三 確率論的説明（行動科学的）

これらの説明理論についての解説は時間の余裕がないので省略いたします。ただ本質理論と説明理論との関係についてのみふれてみたいと思います。

この関係について二つの主張が対立してきました。一つは本質理論と説明理論とは一体的な結合関係があるという考え方であり、決定論的な本質論に立脚するならば、説明理論もまた必然性の強い因果的な説明理論を用いなければならぬという主張であります。他の本質理論に対して説明理論は戦術であるから、過去の地理を説明するためにはさまざまな説明理論を用いることができるという考え方であり、たとえば天文学者のラプラスは天文の世界とは決定論的な事象ではあるが、人間は神のように優れた存在ではないから、説明理論として決定論を採用しないで、その対極にある確率理論を發達させたことは有名なことであります。最近の傾向としては、前者より後者が承認されています。歴史地理学の説明理論は決定論的よりも確率論的に移行しつつあります。その理由は後程ふれます。

叙述理論と説明理論は、特定の結合関係があります。ここでは伝統的歴史地理学の叙述形態についてのみを申し上げて、新しい歴史地理学の叙述形態については後述したいと思ひます。

地理的歴史学は環境決定論であろうが、環境可能論であろうが、いずれも因果的説明理論と結合しています。地歴史学は空間と時間を一点に収中させて事象を説明しようとしています。しかし空間科学の歴史地理学と時間科学の歴史学とに科学分類をするイマヌエル・カント以来の伝統的な時間と空間の概念にもとづいているかぎり、この叙述理

論は結合すべくもなく、叙述形態は破綻を招きます。時の断面は過去の地理を復原する叙述理論が、カント地理学を復興したドイツのアルフレット・ヘットナーやイギリスのハーフォード・マッキンダー等が、その叙述理論を因果的説明理論や機能的説明理論を用い、できるだけ時間性を排除して空間科学としての性格を維持しています。時の断面推積という叙述理論や現在の地域理解のための過去の地理といわれる叙述理論は、過去の地理の起源発達などについて発生論 (Genetic explanation) を用いて時間性を多分に導入しています。これは歴史地理学とは地理的変化 (Geographical change) を叙述する科学であると考えようになつたからであります。また同じく地理的変化を叙述する歴史地理学として、アメリカの占拠系列があります。これは生態学の群落遷移の概念を用いています。これらの空間科学としての歴史地理学に時間性を導入した叙述理論とまったく異なるものは、ドイツのオットー・シュリーターの空間進化系列の叙述理論であります。この叙述理論は発生・起源・変化・発達などの一連の発生的説明を排除して、いわゆる「時間の克服」をして、過去の地理の進化系列を叙述しています。

これらの叙述理論のうち、いくつかが説明理論を共通にしていることから、これらを統一的にまとめた叙述理論をつくりあげました。それは発生論的説明理論を用いる叙述形態で地理的变化を過去から現在までおし通す叙述であります。「過去の地理の時の断面推積」と「現在の地域理解のための過去の地理」と現在地理学の中で「現在の地理に発生的説明を用いる立場のもの」(フランス学派の人文地理学)などが結合しました。かくて過去から現在までの時の断面の地理を堆積させながら、一貫して発生論的説明理論をもつて叙述する歴史地理学の叙述形態が成立しました。

この叙述理論は、イギリスでは、H・C・ダービーを中心として一九四〇年に成立しました。日本では一九五〇年代に藤岡謙二郎先生の景観変遷史法として提案されました。しかしながらイギリスでは一九五〇年代にこの時の断面堆

積は歴史地理学の方法論ではなく、単なる叙述形態であると批判されました。さらにまた一九六〇年代にはこの叙述形態は資料の性格にもとづく実用主義的なものであると批判されました。かくて、今日では、イギリスにおいて、この叙述理論は教義的地位からひきずり落され、これに代って新しい説明・叙述理論が成立し発達しています。

これらの伝統的歴史地理学の叙述理論は、時の断面に過去の地理を復原しても、それは靜態的であります。二つ以上の時の断面の過去の地理を叙述して、地理的变化を示してもそれぞれの地理的空間の動態的变化を叙述する形態ではありません。現代歴史地理学が求めていく方向は、「地理的变化」(Geographical change)であるよりも、「変化しつつある地理」(Changing Geography)であります。これは過去において、地理的事象がいかに地表空間に拡散し、地表空間を変質させていくかのプロセスを叙述することであり、そのためには、地理的事象の立地とそこからの地表空間への拡散と変質を説明するヘーゲルストランドの「空間拡散の原理」などが重視されるでしょう。「空間拡散の原理」はもはやヘーゲルストランド流の古典的なものではなく、新しい発展をつづけ、拡散の形態や拡散の障害や拡散の方向・速度などが研究されています。この新しい叙述理論は「時を追っての変化」(Change through time)とよばれて、各国に大きな勢力をもって普及しています。

「時を追っての変化」という叙述理論は、伝統的歴史地理学の時間・空間の概念にもとづいては考えられません。新しい時間概念を立場として過去の地理をとらえる立場であります。新しい時間概念は改めてくわしく申し上げます。この新しい叙述理論は、最近の新しい歴史地理学の本質理論としての空間的組織論や行動的環境論や新図形論などの出現、ならびに最近の新しい説明理論である計量分析やシステム分析や確率論の説明などの出現と同じ基盤から発生していることに注目しなければなりません。以上のように申し上げたことは、歴史地理学の動向の顕著なもの

一つとしてとりあげた次第であります。これに関連して、最近の動向として注目すべき新しい傾向について、さらに二つの問題について申し上げたいと存じます。

六、絶対空間の歴史地理学への挑戦

歴史地理学の最近の動向としてもっとも注目すべきことを申しあげます。これは伝統的な近代歴史地理学が絶対空間を基礎概念としていましたが、新しい現代歴史地理学は相対空間を基礎概念とするようになったというところであります。つまり歴史地理学が研究する地理的空間は絶対空間 (Absolute space) から相対空間 (Relative space) に移行したというところであります。この移行が本質理論・説明理論・叙述理論において新しい傾向を発生させている共通基盤となっているのであります。

絶対空間の歴史地理学は、紀元前二世紀のエラトステネスからはじまり、二十世紀半ばまでつづいてきました。これに対して、二十世紀半ばから相対空間の歴史地理学が強く主張されはじめました。絶対空間の歴史地理学は十九世紀末から二十世紀前半に完成されました。これがいわゆる近代歴史地理学の成立であります。今日において絶対空間の歴史地理学を克服するために、カント・ヘットナー・ハーツホーン・ダーヴィたちが、相対空間の歴史地理学を確立しようとする研究者から激しく挑戦されています。その理由は彼等たちが絶対空間の歴史地理学をつくり、これを継承して発展させた人々であるからであります。

それでは絶対空間の歴史地理学における空間概念の特質はいかなるものでしょうか。絶対空間は地表面に特定の個性的位置を持っていること、絶対空間には時間性がないこと、絶対空間は諸事象の入れものであること、物体でなく

て理論的・概念的・抽象的存在であること、さらに絶対空間は空間内部の諸事象に影響を与えて空間を個性化・具体化する神秘的な力を持っていることなどであります。絶対空間の歴史地理学は、かくて地域区分をして地表面が寄木細工的な個性地域の集合から成立していることを認識する「地表分類学」となってしまうました。かくて、カントは歴史地理学は空間科学として個性的な空間を記述する科学であり、他方には、絶対時間を基礎概念として空間性を排除した時間科学としての歴史学と相対立する科学に分類されました。

そのために歴史地理学における叙述理論は近代歴史地理学として三段階の変質をしてきました。第一段階は時間性を認めない絶対空間における過去の地理を叙述するために、時の断面に過去の地理を復原してこれを叙述することであります。しかし過去の地理を叙述するために、時間性の代理機能をつとめる説明理論を求めました。因果の説明理論は原因とその結果の叙述であります。これは原因が結果に常に先行する説明であります。生態的機能論の説明は、主体と環境があり、一方が先づ作用し、それをうけて他方が反作用し、かくて相互作用をくりかえすことを説明します。これらの説明と叙述にはながしかの時間性をひそませています。第二段階は地理的变化を叙述するようになりました。時代ごとに異なる過去の地理を叙述するために、時間性を空間に強く導入しました。時の断面をいくつも設定して、それぞれの時の断面上の過去の地理を叙述し、さらに時の断面をいくつも堆積させ、地理的变化の存在を示しました。とくに時の断面における過去の地理は、起源・発達・変化を主として発生論の説明を使用して叙述しました。また発達段階の説明は主に経済史学に乱用されましたが、前の段階と後の段階といういくつもの段階の積み重ねを考えました。時の断面堆積と発達段階が共通に持つ欠陥は、前の段階から後の段階へ変化するプロセスを無視すること、変化させる原動力が内部に存在しているにもかかわらず、これを無視しているにもかかわらず、これでありま

す。第三段階として、時の断面であれ、発達段階であれ、前の段階（断面）の地理と後の段階（断面）の地理との間に、変化のプロセスに注目して、因果関係を認めたことであります。カール・マルクスの経済社会の発展における生産力とか、占拠系列における前段階に後の段階を形成せしめる要因を指摘していることであります。

かくて地理的空間の個性の形成と地理的变化を叙述するためには、しだいに時間性を強く導入するようになりました。しかしかような説明・叙述は絶対空間の歴史地理学に時間性をふくませていくならば、カント地理学の空間科学としての性格喪失となり、カントの科学分類の純粹性を失うこととなります。絶対空間の歴史地理学の叙述理論のうち、時間性の導入をしなかったのは、空間進化系列のみであります。この叙述理論はドイツのオットー・シユリユーターが完成したものであります。これはさまざまな空間に対して、原初形態から最終形態までの系列段階を考え、地面上におけるさまざまな空間がこの系列段階のどこに位置づけられるかと考えました。この空間進化系列は空間に時間の導入をせずして、時間の克服をしたものであります。

以上のように、絶対空間の歴史地理学の叙述理論は、野間三郎先生が批評したように、二十世紀の時代思想を背景として、時間と空間を対峙させながら形成されたものであります。すなわちドイツ西南学派といわれる新カント主義の科学理論によってカント地理学を復興したのであります。

七、現代歴史地理学における新しい時空概念と現代物理学との関係

近代歴史地理学から現代歴史地理学へ移行していくには、この科学の基礎概念である時間・空間の概念を根本的に変えなければなりません。ことに多くの科学はそれぞれの空間概念と、時間概念を持っています。この中では歴史地

物理学の空間概念は、環境・分布・地域・景観などといわれ、他のさまざまな科学の空間概念に強い影響を与えている。ここでは多くの科学の空間概念と、時間概念の特質と歴史地理学のそれとを比較している時間的余裕もありません。しかし諸科学のうちで幾何学と物理学の空間概念はつねに先進的であります。ここで物理学の時間・空間の概念の発展をのべ、これと歴史地理学の時間・空間の概念の移行との関係にふれてみたいと思います。

ヒイマヌマル・カントが空間科学としての地理学と時間科学としての歴史学を建設するとき用いたのは、ニュートン物理学の絶対空間の概念でありました。またそのころの幾何学といえば、ユークリッド幾何学だけしかありませんでした。これらの科学における絶対空間とは、点の無限の集合であり、物体の入れものであり、プラトンの神の感覺機関でありました。そのころすでにライプニッツが絶対空間に対して相対空間を主張しはじめていましたが、いまだリーマン幾何学などは存在していませんでした。したがって、この時代におけるは、ライプニッツはあたかも砂漠の中の説教者でありました。何人もライプニッツの相対空間に耳も傾けることをしませんでした。カントもその認識論哲学を建設するために採用したのは、ユークリッド幾何学やニュートン物理学の時間・空間の概念であったことはいまうまでもありません。

やがて幾何学ではリーマンなどの非ユークリッド幾何学が成立して、絶対空間以外の空間概念が発達しはじめました。二十世紀二十～三十年代に、アインシュタインが物理学における一般相対性原理と特殊相対性原理を主張して相対空間をとりあげました。ポアンカレは、時間と空間はその計測者によって相対的であると主張しました。かくて新しい物理学が成立して、古典物理学と明確な一線をもって区画する時空概念をきそとする現代物理学となりました。この物理学の発達は二十世紀後半の物質観に大変化を与え、科学・芸術にまでも大きな影響をおよぼしました。

空間概念が絶対空間から相対空間に移行するとき、同じように時間概念においても絶対時間から相対時間に移行しました。絶対時間とは瞬間の無限の連続であり、空間性をまったく欠き、等質・等速をもって永遠に連続していきま

す。絶対時間はわからない状態からわかる状態に強制的に変化させる力を持っています。そして絶対時間も神の感覚機関として、すべての物体の入れものであります。絶対時間に対してそれぞれの科学において相対時間の概念をつくりだしました。哲学は瞬間の時間と永遠の時間、心理学の心理的時間、物理学や化学の物理的時間、その他の自然科学の自然的時間、歴史的科学の歴史的時間などであります。さらに進んでは、相対空間と相対時間の両者を融合して考えるようになりました。相対時間とは空間としての物体が継続する時間的連続を意味するようになりました。そこから時空連続体 (Time-Space Continuity) という新しい時空概念が成立しました。そしてこの時空連続を時空分節 (Spatial-Temporal Segment) というべき時間をふくむ空間を正しいと認めるようになってきました。

相対空間の特質について申し上げておきたいと思えます。アインシュタインによれば、相対空間の概念はライプニッツから始まるものではなく、すでにギリシア時代に哲学の中に芽生えていたといわれます。歴史地理学においても二十世紀後半からはじめてとりあげられた概念ではありません。二十世紀はじめ、ドイツのフリードリヒ・ラツェルが都市の絶対的位置と相対的位置を論じて、歴史地理学に最大の貢献をしたことを私たちは見落しています。絶対空間は何メートルという絶対距離によって計測されます。相対空間は人間活動に関係して距離・空間を考えます。相対空間は時間距離や費用距離や社会距離などによって表現されます。また交通・通信の進歩によって、絶対距離・絶対空間は同じであっても、そこには空間縮小・世界縮小が成立します。鉄道新幹線や高速自動車道などによってその沿線地帯は時間的に距離・空間が縮小されることが事例であります。この相対距離を中心にして考えれば、歴史地

理学は距離の科学であるという人々さえも出てきました。

現実において、絶対空間を基底におき、さまざまの指標にもとづいて絶対空間が成立しますから、同一の絶対空間の内部には相対空間の複合性が成立しています。したがって人間とはさまざまの相対空間の交叉の上に生活していると考えられます。かように地理学は絶対空間から相対空間へその基礎概念を入れかえるようになりました。

このことから現代歴史地理学において事象を時空連続体と規定し、時空分節において説明・叙述するようになりました。そこにはもはや時間性のない空間を考えたり、時間と空間の相互矛盾などはありません。本質理論としては、新分布論として空間構造と空間過程からなる空間組織論があります。また新環境論としては、絶対空間に対する環境イメージによって知覚された空間、すなわち行動的環境論が打ちだされます。かくてこれらの新本質論による空間表現には、従来空間の地図を変容した相対空間の地図を作成する新図形論が盛んになりつつあります。

説明理論としても、システム分析が体系づけられ、計量分析が開発され、さらにドイツ西南学派が知らなかった「他者理解」の説明は解釈的方法によって発達します。歴史地理学は全体として必然性が強い決定論的に説明することから確率論的説明に移行しつつあります。必然的な変化を事象に強制すると考えられた絶対時間は、すでに十九世紀末に、物理学者のボルツマンが先駆的に述べたように、時間とは最小の確率から最大の確率までの幅をもって変化すると考えられていました。このような時代思想を背景として、歴史地理叙述は「地理的变化」の叙述理論から「変化する地理」の叙述理論に移行するようになりつつあります。かくて成立した新しい叙述理論は「時を追っての変化」であり、いわばそれは「時空融合型」という叙述形態であります。

八、歴史地理学の知識性格論の展開

歴史地理学の最近の動向として第三番目にあげますのは、過去の地理についての知識性格論が展開しはじめたことでもあります。これは過去の地理について性格の異なる知識の領域が三つもあることをしだいに強く自覚してきたことでもあります。

イギリスのH・C・プレンスは、多くの人々の考え方をまとめてこの三つの知識の性格を次のように区別しました。

一 実在的世界 (Real world) の知識

二 抽象的世界 (Abstract world) の知識

三 知覚的世界 (Imagined world) の知識

過去の地理について、具体的に個性的に記述した知識は実在的世界の知識であります。過去の地理をつくっている構造についてモデルを用いて一般化した知識は抽象的世界の知識であります。過去の地理をその当時の人間集団の立場になって、いかに環境を知覚してこれを評価し、この環境イメージをきそにして意志決定をし、空間的行動を行なうって景観・地域をつくりあげたかを明らかにすれば、それは知覚的世界の知識となります。

実在的世界の知識は伝統的な近代歴史地理学の知識であります。これに対して、最近になって新しい性格を持った知識が二つも発達しています。一は計量分析法が発達して抽象的世界の知識が生産されています。二は行動的環境論が発達して知覚的世界の知識が開発されはじめました。かように過去の地理について、三つの異なる性格の知識が鼎立しています。かような状況は、歴史地理学の発達史において、第二回目であります。しかし第二回目である最

近の傾向は、第一回目の単なる復活ではなく、そこには新しい発展と研究者の自覚が強く見られます。

第一回目の三つの知識性格論が鼎立した時期をふりかえってみたいと思います。この時期は十九世紀末から二十世紀二十年代まででありました。いわゆる近代地理学の確立期であります。この時代のはじめにカント地理学からアレキサンダー・フンボルトやカール・リッターなどをへて、フリードリッヒ・ラツツェル・E・C・センブルやハンチントンやグリッルス・テラーなどの活躍期までふくめます。歴史地理学が成立してほかに自然科学化が強まり、環境決定論が確立して、歴史地理学の法則定立を重視する傾向が強くなっていく時期であります。

フンボルトは宇宙において調和的統一の原理が存在していることを信じ、いかなる僻陬の土地にもこの原理が反映していると考えていました。リッターは人間と環境との関係についての法則が存在していることを確信して、これを徐々に建設しようとした。時代思想が浪漫主義から機械論的唯物論主義に移行するに当たって、歴史地理学の自然科学化が強まり、ラツツェル・センブル・テラー・ハンチントンたちは粗雑な歴史地理学の法則を提出しはじめました。歴史学においても、バックルの「英国文明史」のような自然科学的な法則と規則性を歴史的事実に追求していました。この時期は、不完全ながらも法則定立を求め、自然科学化をたどり、抽象的世界の知識の生産を促進していたのであります。

この歴史地理学の自然科学化に対して、二十世紀初期に、ヘットナーは方法論の独立宣言を行い、文化科学的な、個性記述の歴史地理学を確立しました。これはカント地理学の復活であります。ヘットナーが就任したハイデルベルク大学は、ビンデルバントやリッカートなどの新カント主義の哲学の論陣を展開してきた牙城でありました。彼等は西南ドイツ学派とよばれ、諸科学の自然科学化の傾向に対して、自然科学に対する文化科学として、法則定立の科学

に対する個性記述の科学として、抽象的の科学に対する具体的の科学として、分析的の科学に対する統合的の科学としての科学の方法論の独立を宣言したのであります。当然のことながら、その中にあったヘットナーも個性記述の歴史地理学を建設しました。かくて歴史地理学の知識の性格は実在的世界の知識となりはじめました。この歴史地理学が日本のみならず各国にも普及し、個性記述の歴史学とともに、しだいに勢力を拡大しはじめて、やがては法則定立の歴史地理学を圧倒するようになっていくのであります。

当時の歴史地理学の知識性格論はこの両者の対立だけでは終りませんでした。これらの二つの知識とは異なる第三の知識領域が開拓されました。それはマックス・ウェーバーやヴェルナー・ゾンバルトやC・O・サワーやラルフ・ブラウンなどを先頭とする社会学・経済学・文化地理学・歴史地理学の人々でありました。その知識の性格は、マックス・ウェーバーはこれを誇って、西南学派の新カント主義者達の知らざる知識領域であるとさえ自讃しています。これらは理解社会学や理解経済学や理解歴史地理学ともよばれるでしょう。いずれも、法則定立か個性記述かの一面的な強調に偏することはなく、他者理解という理解の方法からみきびきだされる理解の知識であります。この理解的知識は、当時流行したデルタイの解釈学などをきそにおいています。かくて十九世紀末から二十世紀二十年代における知識性格論は、法則定立的知識と個性記述的知識と理解的知識の三つの異質的な性格の知識が鼎立するようになりました。

今日は第二回目の知識性格論が歴史地理学に自覚されて新しい展開をしています。伝統的歴史地理学といえ、ヘットナーが主張した実在的世界の個性記述の歴史地理学がながい期間にわたって主流となるに至ったからであります。しかし過去の地理について個性記述のみでは、事象の個性的側面のみを強調するだけであって、他の科学のような法則定立はできないので、歴史地理学は科学体系としては充分ではありません。これに対してモデルと計量分析法

を用いて、抽象的世界の知識を拡大して地理的法則を発見しようとしています。しかしこの抽象的世界の知識は事象の個性的側面を明らかにしえませんが、これらに対して行動的環境論を開発して、理解的知識を環境心理学や行動科学をきそとして知覚的知識を再開発しようとしています。このモデルビルディングと計量分析法は歴史地理学において使用されているばかりではなく、個性記述にもっとも徹底してきた歴史学においても数量経済史学として発達しています。また行動的環境論は歴史地理学だけではなく、考古学・民俗学・人類学・社会学・心理学などの多くの科学の基礎理論となりつつあります。いずれも学際的に共通な方法論となりつつあることに注目しなければなりません。かくて、現代歴史地理学は第二回目の知識性格論の三者鼎立する百花斎放の中にその華やかさを競うこととなります。次に簡単ながら三つの知識の性格についてふれておきたいと思えます。

九、実在的世界の知識の性格

これは伝統的な近代歴史地理学の知識の性格であります。その主な知識性格をつぎのようにあげることができま

す。

一、過去の地理についての具体的・個性的な知識であります。ヘットナーやハーツホーンやダービィは、個性的な絶対的位置をしめている空間の中に、諸事象を統合してできる地域性・地域差を生産します。この絶対空間をきそとしている時の断面上の過去の地理を因果的、機能的に説明したり、あるいは発生論的に説明したりしている知識であります。

二、この絶対的空間の個性は、どの時代にどこに、かような形態をもって存在していたというように、外部から観

察された事実的知識であり、外部から存在している状態を明らかにした知識であります。条里制の土地割がこのような存在していたとか、城下町はかような形態で存在していたなどあります。そこには当時の人間集団が地表空間をいかに評価して意志決定して空間的行動を行い、この景観地域を形成したかという当時の人間集団から内面的観察した知識ではありません。

三、過去の景観・地域について、その本質の個性的側面をとらえることに成功しています。しかしそれらの事象が持っている共通性的側面の知識を抽出することに努力が欠け、さらに進んでは、一般化・理論化・法則化することには自覚が欠けています。たかだか類型的段階にとどまり、地表分類学に停滞し、帰納法の限界を露出しています。類型は動遙的な段階に位置をしめるものであり、いずれは個性的方向か一般的方向かに変質していく中間性の知識であります。もし近代歴史地理学が個性記述のみにとどまっているならば、地表における無限にあるべき個々の空間の個性を明らかにすることは、いかほどの時間をかけたらこの地表分類学が完成するのであるのか、そして、この個性的空間の将来を予測することを、何時になったならばわれわれができるようになるのかなどについて、われわれは思いを致すこともできません。

一〇、抽象的世界の知識の性格

抽象的世界の知識の性格は、右にふった「時計のふりこ」を左に振りすぎた感があります。この知識の性格は次の通りであります。

一、Here and Now の空間から model building をして、現実的・具体的知識をとりさり、理論化をして法則

定立までおし進めた知識であります。もはや絶対空間が持つ個性的・絶対的位置とは無関係であります。

二、地表空間を構成している諸事象とその結合関係からなる構造を明らかにしている抽象的知識であります。あたかも皮も肉もない骨組だけの知識であります。場所によって異なる地域性・地域差とか具体的に目に見える景観の個性をとくに重視していません。それらはこのモデルからのズレまたは偏倚性であるにすぎないと考えています。

三、過去の地理的事象について、質的な面を顧りみないで、可能なかぎりの量的な数値に事象を整理して、これを数学的な函数関係に表現します。そのため、抽象的知識は過去の地理的事象の本質をとらえることを放棄したものであります。いや本質のうち的一般性的側面のみをとらえたものであります。そのかわりに過去の地理の諸事象のプロセスを重視して、これらの諸事象をつらぬく法則を手に入れることができたのであります。

四、かくて歴史地理学は伝統的に世界における「さまざまの土地とさまざまの人々」を考えてきた実在的世界に袂別しました。実在的世界はさまざまの文化をもった諸民族がその居住地にさまざまの個性的な空間を多様に形成している事実を無視せざるをえません。それはあたかも世界の地表面をすべすべした象牙製の撞球の球のような等質な世界であると仮定している知識であります。ヘットナーの名著「地理学、その歴史、その本質、その方法」の言を借りていえば、「姿態も色彩も、多種多様な現実のありのままの姿―それ故にいきいきとした様の風格を具えているが―この表現は天才ゲーテによるものである。それとともに、他面には単調な色彩であつて、形態の変化もすくなく、前者よりも単調であり、抽象化され、模式化された第二の姿があらわれる。この姿は、それが故に一層見やすく明らかで合理的に区別され、精確性を帯びているが、―レッシングによれば―それは味けなき表現である」ということになり、また、抽象的な世界の知識は、文学的表現ではあるが、世界をあげけなく表現して、自然科学的世界観をもって見直

すことになるでしょう。

一一、知視的世界の知識の性格

最後に、知覚的世界の知識の性格について申し上げます。これは行動的環境論とか知覚的環境論といわれる本質理論から生産される知識の性格であります。そしてまたこの先駆として「理解的知識」が先導しています。これは多くの人々が力強く開発している知覚性格であります。

一、知覚的世界の知識は絶対空間の知識ではなく、相対空間の知識であります。實在的世界の地理的環境に対して、どの人間集団も独特の文化というフィルターをかけて、現実からその文化集団の立場から選択して知覚して経験し、かくてその文化集団の独特の環境イメージをつくり、これを絶対空間からとりだした知覚的空間とし、その中で文化集団は意志決定して空間的行動をし、地域・景観をつくりだす空間過程を行うものであります。これが絶対空間に対する相対空間の知識、または地理的環境に対する知覚的環境、または行動的環境といわれる知識であります。

二、知覚的世界の知識は、過去の地理を外部的観察するのみでなく、内部的観察することを重視した知識であります。知覚的知識は—ゾンバルトに言わせれば—楽屋裏から芝居を見ている—わけであります。つまり過去の地理をこれら形成した文化集団の意志決定や空間行動を内部から観察していく知識であります。過去の地理をその当時の人々の立場になって当時の人々の環境評価を、現在の私たちがこれを再発見しようとして獲得した知識であります。

三、知覚的知識は決定論的な知識ではなく、確率論的知識であります。客観的な実在空間に対して、個々人ごとに、または文化集団ごとに独特の文化フィルターを持って経験していますから、個々人ごとに、または文化集団ごとに、

それぞれのメンタルマップ（環境イメージ）を形成していることを明らかにする知識であります。人間は情報を環境から完全に獲得できません。また人間は完全な合理性の下で行動はできません。したがって実在的、客観的世界と知覚的世界とちがいがあがることはさげられません。かような現実的世界の中で、人間集団が活動するときには、つねに不確実性の中で意志決定をして行動をしていることとなります。経済学の *homo economicus*（経済人）のようなあらゆる現在の情報を正確に獲得して、将来を神の如くに見透しを持って、これらを基礎にしまったく合理的に行動する人間集団や個々人は存在していません。経済学の法則・理論は現実離れをしているのは、かような人間観を持って組立てられた科学であるからであります。したがって、文化科学・社会科学においては、かような決定論的な性格が強い知識を生産できるものではありません。そうでないとするならば、確率論的知識を生産していくことが正しいと思うのであります。

四、知覚的知識は現実が理論をテストするのではなく、理論が現実をテストする知識であります。それは二十世紀のはじめごろ、ウェルナー・ゾンバルトが提案した「合理的図式」とか、マックス・ウェーバーが提案した「理念型」などであります。これらは現実を研究するための調査目録でありました。歴史地理学においても、C・O・サワーやラルフ・ブラウンのように過去の特定の文化集団がその文化フィルターを持って行動的環境を形成すると主張した思考操作と同じことであります。抽象的世界のモデルは現実を研究した結果であります。理念型や合理的図式や文化フィルターは、現実を研究するための準備であり、研究の出発点であります。これらの思考操作によって、現代歴史地理学の知覚的世界の知識は、対象とする過去の地理の個性的側面も普遍的側面も追求することができます。

五、知覚的知識は集団的性格・集団パーソナリティを重視する知識であります。もはや経済学の経済人のような超

人間像は考えられません。歴史地理学において、十九世紀末から二十世紀初期にかけて、古典的環境論が本質理論として流行した時期に集団性格を重視したことを思いだされます。環境決定論では環境が集団性格を形成しました。環境可能論は生活様式を持つ人間集団を前提において研究しました。しかし地域論を本質理論とする時期になると、歴史地理学は集団性格の問題を避けて通りました。しかし景觀論を本質理論とすれば文化力が景觀を形成するから、集団性格を重視し、さらに社会地理学に発達すると人間集団を前面におしだしてきました。現代歴史地理学においては、空間的組織論にしても行動的環境論にしても、人間集団の性格を重視せざるをえません。そのために集団性格の概念として、最適者と満足者の概念、必然者に対して確率者の概念、あるいは個人スケールと総括的集団スケールなどの人間集団概念が提案されています。いずれにしても、現実と未来は不確実性の世界でありますから、その中で空間行動をいかにすべきかと意志決定者の概念と理論が重要であります。

また集団性格と個人性格との関係も見逃すことができない問題を提示していることに注目しなければなりません。行動的環境論においては、集団の文化フィルターが異なるから、絶対空間の地理的環境が同じでも、集団が異なれば、それに対して集団ごとに異なる環境イメージが形成され、異なる行動的環境が成立します。しかしながら、同一の文化集団に属していても個々の性格は個性的な側面が強く表現されますが、同一文化に属するかぎりは多数の個々の性格も行動にも共通性があることは、他の文化集団に比較すれば明らかにとらえだすことができます。これは集団が持つ文化を個々人が学習するからであり、社会抱束に強制されるからであります。一般的にいえば、集団行動は慣行軌道を守り、安定化した行動を好みます。これに対して個々人の行動は創造力や社会抱束に反する行動もあり、このような個々人の行動は集団文化の進歩・発達の原動力となります。

六、知覚的知識の法則は、このような個人的行動や集団的行動にも発見されます。ここで法則という用語について科学によってさまざまな定義があることにふれておかねばなりません。物理学のように例外を絶対に認めないような演繹的法則もありますし、その対極に立つ確率的法則もあります。またどの科学においても、その領域内のさまざまな事象にみいだされる共通性を法則ということもあります。また集団的事象の平均化した傾向を法則ともいいます。これは統計法則などであります。行動科学が興ってきますと、人間集団の平均的行動を行動科学的法則といえます。人間集団の中の個々人の行動の例外はよく見られます。法則といえるには、どこまでこのような例外を認めることができるのか、あるいはまたこれ以上の例外があれば法則ではないという限界は明確ではありません。

現代歴史地理学において、集団性格が重視されるならば、その法則は行動科学的法則であり、決定論的な、例外を認めない法則ではありません。行動科学的法則とは集団行動の平均化した傾向であります。この法則は必然的に人間集団に対してかくかくしかじかの行動に規制するような命題ではありません。行動科学的法則は人間集団の行動のかたそのものを表現する命題であります。また行動科学的法則は既知の事象や既知の行動から、未来の事象や未知の事象を予測する命題であります。かように、法則はさまざまであるというよりも、法則の概念を変化させることが必要であります。

一二、終りにあたって

この講演に与えられた時間はもはや過ぎてしまいました。時間の都合から、とりあげなかつた諸問題が多く、主なものいくつかを申し上げたにすぎません。とくに最近の歴史地理学の動向を申し上げるならば、「未来の歴史地理

学はいかなるものであるか」という問題について当然のこととしてふれなければなりません、これも割愛せざるをえません。

私の講演は具体例にとぼしく、概念的に終り、御理解に苦しむことが多かったと思います。現代歴史地理学の発展のためには、実在的世界の知識といい、抽象的世界の知識といい、知覚的世界の知識といい、これらは相排斥しあうものではなく、これらを自覚して区別しながら、適切に利用して過去の地理をより正確にとらえることに協力できるようにしなければなりません。

かくて現代歴史地理学は未知の知識の大陸、テラ・インコギニタを発見し、新たな研究エネルギーを爆発させてこれを開発・探検に前進すべきであると思えます。御静聴をありがとうございました。